

源氏物語の美

岡崎義

岡崎義恵著作集 5

源氏物語の美

宝文館刊行

昭和三十五年七月二十日 第一刷 発行

源氏物語の美

定価 1200 円

著者 岡崎義恵

発行者 宝文館

(代表) 高橋長夫

印刷者 根本力三

東京都新宿区東大久保二の七八

発行所 株式会社 宝文館

東京都千代田区神田神保町三の七
振替 東京・二八〇

印刷・中教印
製本・大光堂製

序

「源氏物語」は今では一般の人々の愛読書にもなっているようであるが、私の学生時代には、専門外の人はあまり読まなかつた。今日でも現代語訳ですませる人が多く、原典を披くものは少ないであろう。大学に入るまで、教科書として「源氏」を教えられたことはなかつたが、高等学校の学生のころ、与謝野晶子の現代語訳が出たので、私もかなりこの書に興味を寄せた。しかし晶子の「新訳源氏物語」の初版は、装幀・挿絵は華麗を極めていたが、中沢弘光の装画は洋画か日本画かわからないものだったし、晶子の訳も西洋小説の意識のようで、私には異様に感じられた。それで私は博文館の「校註国文叢書」本で、「須磨」あたりまで、独習したのである。

東京大学に入つて、芳賀矢一先生の講読をきいたが、学生に「湖月抄」の木板本を持たせ、現代小説をよむように、どんどん口訳して行かれるのに一驚した。その時分私には、「源氏」は中々よみにくく、一語一語不審を重ねて行く有様であつたから、この講読には驚いたが、また甚だ物足りないものであつた。それで、当時世評の高かつた紫影・醒雪・瓊音・臨風共著の「新釈源氏物語」を、感心しながら読んだもので、自分もいつかこのような評釈を完成してみたいと思つていた。しかしこれは

まだ今日でも、何人もなし遂げることのできない仕事であつた。

東北大学の講座を担当するようになって、私は学生相手にそろそろ本格的な「源氏物語」の研究にとりかかり、数十年は経過した。はじめ「枕草子」の方が面白いと思つたのは若気のなすところで、年を重ねる毎に「源氏」の方に深く吸引されるようになった。今日では全く「源氏」礼讃者の一人であるが、私のなし得た研究成果は、まことに貧しいもので、その概略は本書の「源氏物語の美の探求」に書いてある通りである。本書に集めたものは、原稿の形をなした私の「源氏」研究の、ほとんど全部に近いものである。本書の中で、「源氏物語の小説的構造」は、昨年書いたものであるが、十分な時間がなかつたため、意をつくすことができなかった。もつと多く原文を引き、多くの妙所を指摘して、その美を明らかにしたいという念願はなお残つてゐる。かつて愛読した「新釈源氏物語」のようなものは到底できないにしても、その精神を捉えたようなものはできないこともなからう。しかし今では、もう一度生れかわつて来なければできないことのようにも思われるのである。

「源氏物語」は和歌の伝統の上に立つ、詩的表現を持つ作品であるから、これだけは是非原本を読み、口訳・梗概・註釈・評論の類は参考とすべきである。本書もその参考書の一つとして、いささかの役割を果し得れば幸いである。

昭和三十五年六月

岡崎義恵

源氏物語の美

目

次

序

第一部 「源氏物語」の美

「源氏物語」論序章	三
愛の世界	二三
死をめぐる美	三六
光源氏の道心	五五
美の諸相	五五
美的範疇と美的様式の問題	一九
象徴的表現	一四
「源氏物語」「枕草子」の絵画性	一五〇

物語における季節		一九二
----------	-------	-----

第二部 「源氏物語」の小説的構造

物語と小説		二三三
-------	-------	-----

長篇小説としての構想		二四二
------------	-------	-----

一 「源氏物語」の筋の分析		二四二
---------------	-------	-----

二 光源氏の青年期		二五八
-----------	-------	-----

三 光源氏の中年期		二七三
-----------	-------	-----

四 光源氏の晩年期		二八三
-----------	-------	-----

五 宇治十帖の長篇的意義		二九六
--------------	-------	-----

中篇的、短篇的要素		三二三
-----------	-------	-----

一	中篇と短篇	三三
二	中篇的物語	三七
	藤壺の物語	三七
	明石上の物語	三二
	六条御息所の物語	三六
	朧月夜の物語	三八
	玉鬘の物語	三三
	雲井雁の物語	三六
	落葉宮の物語	三六
三	中篇的または短篇的物語	三七
	空蟬の物語	三七
	末摘花の物語	三〇
	葵上の物語	三四
	花散里の物語	三七

髭黒の北の方と真木柱の物語……………

三九〇

四 短篇的物語……………

三九三

桐壺更衣の物語……………

三九三

夕顔の物語……………

三九五

源典侍の物語……………

四〇五

近江君の物語……………

四〇七

第三部 「源氏物語」の研究と現代化

「源氏物語」の文芸学的解釈……………

四一五

「源氏物語」の鑑賞の仕方……………

四二三

「源氏物語」の美の探求……………

四三五

谷崎源氏論

——古典の現代化と大衆化

「源氏物語」の現代化

——歌舞伎と映画の「源氏物語」

本書収載論文

四五一

四七三

四八七

第一部 「源氏物語」の美

「源氏物語」論序章

「竹取」「伊勢」を出発点として、次第に成長して行つた、古代の作り物語は、「宇津保物語」のような長篇を出すところまで進んだ。

「宇津保」の後に出て平安時代の物語の頂点を形造つた「源氏物語」は、紫式部の作であるということは、今日では別に疑う程の材料がない。紫式部は藤原氏の榮華の絶頂をなす道長の豪奢を極めた時代に遭遇した人で、「源氏物語」は一般の物語の手法を襲つて、舞台をそれより一世代以前に採り、昔のことを物語るといふ伝承的形態を見せてはいるが、しかし、實質的にいえば、その時代の写実であると思われる点が多い。道長時代は藤原氏の絶頂であるが、古典文化の全体から見ると、すでに下り坂に一步を踏み出しているのであつて、晴朗な樂天的気分や健全な統一的態度は幾分失われ、憂鬱と頹唐との分子がかなり多量に加わつてゐる。満開の花の次第に崩れを急ぐが如き、華麗で、しかも悲哀を催す感情が、この中に籠つてゐるようである。歛樂極つて哀情の生ずる瞬間が、いみじくも把

握されているといつてもよい。そこにいわゆる物のあわれの典型的な姿が成立したのである。

感情の方からいうとそうであるが、知的方面からいうと、観察は次第に細かになり、目前の印象に身を委ねる傾は減じて、著しく思念的、反省的となつてゐる。簡朴な描写ではなくて、紆余曲折を尽して、前からも後からも斜からも、種々の方面から委しく物事を考え、軟らかく心情を照し出して行こうとする。直接中心に迫ることなく、徐々として事実を究めて行き、ふわりとした空気の中に対象を泛べ出そうとする。「源氏物語」の非常に長篇的な、いつ果てるとも見えない煩雑な事件の流れ、一読しては真意を掴み取れないような難解な文章は、このようにして生じたのである。これらの特色はすべて「伊勢」「竹取」などとは違つたもので、「古事記」とは反対のものと考えられ、その間に時代の差が明らかに認められるのである。

この特色にはまた、作者の個性も加わつてゐるらしく想像される。紫式部は明敏な、しかしまた謹厚で謙讓な性格を持つていたらしく、才学の誇や洞察の鋭さを内に包んで、静かに周囲を観察し、批判し、同情する人であつたらしい。「紫式部日記」によつてもそれが知られるのである。同時代にできたと思われる清少納言の「枕草子」が、もつと鮮明な鋭い感じのするのと比較すると、「源氏物語」には紫式部の人格が出ていると見なければならぬ。紫式部は、夫に別れて寂寥と孤独との生活を送つてゐる間に、この作を書き出したらしく、必ずしもその全部が後の宮中生活の間にできたものではないと想像されるが、そうすれば作者の性格のみならず、その生活気分もまた、この中に発露してお

り、落着いた想像と、さびしい同情とが、この生活の中から生じたという意味もあるかと思われる。

「源氏物語」五十四帖はその説話の形から見ても、精神内容から見ても、前後二部に分れ、両々相對して深い意味をなしている。正篇四十四帖において、華やかなけれどもしめやかな光源氏の恋の成功を写し、続篇宇治十帖においては、陰鬱悲哀の氣に満ちた薫大將の失恋を描いている。この二主人公を結ぶ鎖となつてゐるのがまた注目に向する。光源氏の思うままに花に戯れた一生は、遂に己の子として養う薫大將が、他の男の密通の胤であるという、忌わしい結果となつたのである。薫大將はすでにこの暗い影を背負つて生れ、為す恋も為す恋も父に似ぬ失望の中に葬り去られる。「源氏物語」の構想を見るのに、万葉的な明るい生活意欲は、次第に暗い失望の悲しみに移つて行き、その間に、避くべからざる因果応報の網と、運命の鎖との、張りわたされていることが認められるのである。

前篇の主人公は、作者をはじめ当時一般の人々がこうありたいと考えた理想的人物であつて、光源氏は当時の貴族に通有の色好みの性ではあるが、單なるまめ人よりは却つて魅力があり、あわれを知る人であるから人情に厚く、一度関係した女はどこまでも世話をするという風で、世故には通じ才学はあり、身分は高く容貌は優れ、境遇も性格も万人の羨望するところである。これに配する紫上は、嫉妬という女らしい感情もある人ではあるが、それは欠点というほどではなく、つつましく高雅な、そうしてまた、人の心を和やかにするような美しさを持つた人で、幼い時から光源氏に引きとられて理想的に教育された故もあろうが、たとえそうでなくても、修養せずしてすでに十分教養されたよう

な完全な女である。そのほか、様々な女性が現れるが、各々或る一面の長所を具えた人達である。今日から見ると、そのいずれもが意志の弱い、十分に知性の発達しない人のようにも見え、余りに感情的な性格であつて、しかも美的感覚が余りに鋭敏で、何につけても優美・調和・繊細というような点を重んずるため、感情と雖も強烈とか辛辣とかいう方ではない。物のあわれ、物のみやびを解するという一面に徹した、単調な心を持つものである。人間として尊ぶべきは、素質においては程よき感情、教養においては洗練された芸術——特に音楽・書・和歌——の道のみであるかの如くにも思われる。

「源氏物語」においては権力の争はあつても、善人と悪人との軋轢には乏しく、榮華を望む心は熾烈でも、倫理的要求はさほど強くないのである。また、ほのかな厭世無常の観念はあつても、熱烈的宗教的精神と現実生活との葛藤は認められない。従つて、仏教思想は相当深くあらわれているが、宗教的なものが全体を統制するというほどの力は持つていない。概して感情が支配的であるとはいへ、親子の愛や主従の情誼などは中心にはならず、恋愛の中に醗酵される、やさしい悩みや喜びが、主として捉えられている。その中で最も深刻な芸術的作因を求めると、藤壺・女三宮・浮舟の三女性をめぐる密通事件によつて導き出される悲劇的苦悶と、悲痛な生から超脱しようとする幽かな意欲とであるが、ここでも罪障意識の表現は余り著しくはなく、やはり物のあわれの感情が主になつてゐる。

続篇になつて、主人公の薫大將は宇治の大君おおいきみに對する失恋の苦を癒そうとして、恋しい人の面影を追ひながら、その妹の中君へ、更にまたその妹の浮舟へと、三人の姉妹の心を求めて転々として移つ